

◆ 小林 貴子 選

六度も蛇皮を脱ぎいまだ蛇

(所沢市) 藤塚 貴樹

一皿つつ説明される夏料理

(札幌市) 樋山ミチ子

褒めてゐるやうで悪口アロハシヤツ

(鎌ヶ谷市) 海野 公生

夏盛ん朝日俳壇みな元氣

(名古屋市) 鈴木 修二

兄弟のこぼれさうなるハンモック

(大阪府熊取町) 森田 恵子

竜宮の跡は水母のゐるばかり

(横浜市) 藤本 博夫

鉢入れ終わりとするや七変化

(東松山市) 鈴木 圭

扇風機心配そくに振り向きぬ

(東京都新宿区) 各務 雅憲

常連の席は金魚の真正面

(群馬県東吾妻町) 飯塚 要

夏瘦やふとむつかしいと言ひ

(茨木市) 角島 健二

【評】一句目、若い蛇は一年に何度も脱皮する。違う生き物になってしまわないか。二句目、額きつつ聞いた後に美味しさを堪能する。三句目、言われたほうは釈然とせず、小骨のようにひっかかる。四句目、みんな元気で俳句を詠み、読もう。

◆ 長谷川 權 選

戦争は大きな柩八月来

(横浜市) 田中 清春

ラジオから国敗れしを聞く裸

(名古屋市) 熊谷貞次郎

ソーダ水我に過ぎたる空の色

(東京都杉並区) 阪本絵理子

誕生も逝去せし日も蟬の声

(直方市) 岩野 伸子

列島の水汲み尽すかき氷

(長崎市) 下道 信雄

猫の水氷一片浮かべたり

(枚方市) 阪本美知子

人生に無駄積み上げて虹仰ぐ

(金沢市) 前 九疑

八月や昭和を思ふ一分間

(大津市) 小見 伸雄

ここに湧く清水をたのみ行者堂

(葛城市) 八木 誠

暑さにも世にも黙つて抗しけり

(山梨県市川三郷町) 笠井 彰

【評】一席。多くの人々を入れる柩。蓋はまだ開いたまま。二席。何もわからない裸のこども。八十九歳の記憶。三席。「私にはもったいない」と思う。あざやかなソーダ水の色に。四句目。歌人の河野裕子。十句目。声を上げたいときもある。